

座右の銘



し し ふ とう
孜 々 不 撓

安井 弥 大学院医系科学研究科 医学分野 分子病理学 教授

座右の銘として「不撓不屈」はよく登場します。第65代横綱貴乃花が昇進の口上で「不撓不屈の精神で不惜身命を貫く」と述べたことでも知られています。強い意志を持ってどのような苦境にもくじけないことですが、目的を成し遂げるまで諦めない決意を表すためには、自らを高め続ける行動が伴わなければなりません。「孜々／孜孜」とは、学問、仕事に懸命に励み弛まず努力し続けることです。福翁百話にも、「人間社会自ら義務あり」として「人間は同類に対して関係深きものなれば、我身の果して仙人ならずして社会雑居の一人たることを知る者は、体力を強壯にして精神を活発にし、以て先ず一身一家の生計を営み、身を粉にしても直接に他人の厄介たることなきを謀り、「孜々」勉強すると共に、常にその見る所を広くして社会公共の利害に注意し、等しく事業を営むにも間接に世を利するものを択ぶこそ本意なれ。」として使われています。教授就任時の20年前、書・陶芸家の松村 数範氏から「孜々不撓」の書をいただきました。孜々不撓：弛まぬ努力を続けどのような困難に直面しても屈しないこと、が私の座右の銘です。新型コロナウイルス感染症拡大も大きな困難ですが、輝く未来の分子病理学、広島大学のために頑張りたいと思います。



松村 数範氏の書

為 せ ば 成 る



茶山 一彰 大学院医系科学研究科 医学分野 消化器・代謝内科学 教授

私は座右の銘というのは嫌いで、自分のものとして持っていたことはありませんでした。というのも、高校を卒業するときに、みんなで寄せ書きを作っていたのですが、初めの方に書いた人が、張り切って立派な格言などをたくさん書き、最後の方に書く人はスペースもあまりなかったのですが、ある尊敬していた先生が小さなスペースに高言美麗（高言は美麗なり、偉そうに大きなことを言うことは美辞麗句、つまり美しい言葉だけを並べ、飾り立てた文句、うわべだけのお世辞などといった意味だということです）と書かれていたので、立派な言葉を大きく言うことに何となく抵抗感を持つようになっていたのです。

しかし、そういうことを全くなしではいけないということに遭遇したこともありました。それは、広島大学の教授選考にアプライしてインタビューを受けた時に、最後の質問として突如「あなたの座右の銘は何ですか？」と聞かれ、「ありません」とか「嫌いです」とか言うことができず、とっさに「為せば成るとか、石の上にも三年とか、がんばればなんとかなると思って自分を励ましてきました。」と答えた時のことです。以来どうしても自分が座右の銘を言うことを求められた時のための私の座右の銘というのは「為せば成る」になりました。今回まさに逃げられない座右の銘を示すことになりましたが、努力すれば何とかできるという感覚は嫌いではありませんし、為さねばならぬも本当だと思います。